

## 周桑和歌資料三種

愛媛県周桑地方は、明和・安永の頃多くの冷泉為村門人が出て、和歌の隆盛をみた。俳諧の広く普及した伊予にあつて、これは珍しい現象である。その資料の一部は「周円法師の『松葉集』」「石岡八幡宮の和歌資料」「佐伯貞中の和歌」（本誌第一五・一六・一七巻）「宥宝・周円の兩乞の歌」（「愛媛国文と教育」第一六号）に紹介したが、今回は新たに発見した資料を含めて、次の三種四本を翻刻紹介する。

### 一、「綾延八幡宮」歌会稿

写本（半紙本）一冊。綾延八幡宮蔵。書名は見当らないので仮題を付した。末尾に「義辰」の印があるので、当神主豊田織之助義辰の書写になるものと思われる。表紙見返しから一丁目にかけて「豊田大和守五位下」「豊田大和守藤原朝臣」等の落書きがあるが、義辰を指しているものと思われる。なお一丁目裏から二丁目表に次の二首が書かれているが、これも「歌会稿」とは別の義辰の歌であろう。

### 冬 月

冬の夜の月のかつらのかけさへて氷りやすらんかしのさむけき

山里にいねおほくあるところ

白方 勝

（国文学研究室）

山里や千町のをしね豊年の穂にあらはれて秋風そふく

本書は、「夜春雨」「寄名所恋」「夕樵夫」の三題についての歌会の記録である。歌には点を付し、添削・評もしているが、点者は不明。終りに別に七首をあげて評を付してあるのが高点歌である。歌会の場所も記載がないが、「義辰取次」とみえるところから、やはり綾延八幡宮で行われた分とみてよいであろう。

集った歌人四十名（厳密に数えがたい者もある）のうち二十九名は、石岡八幡宮「詠百首和歌」の歌人でもある。石岡の玉井忠成・忠尚父子、市女、喜美女、民女の女流、そして義辰等である。これらの歌人は「詠百首和歌」により素性がわかるが、季山（理山も同一人物か）、墨淵、展睦、宥峰、好三、義政、政次、定長は一切が不明である。

歌会の時期も「詠百首和歌」とほぼ同じ頃であろうから、安永、遅くとも天明の初めまでであろう。

本書の出現によって、石岡八幡宮をメッカに行われていたと想像されていた東予歌壇が、実はこうした各地の歌会の上に成り立ったものであることが判明したことの意義は大きい。もう少し推測をすれば、享保の

頃の「神祇講詠草」(石岡八幡宮の和歌資料)参照)のような各神社持ち廻りの歌会がこの時期も行われていたのではないかと思わせる。とすれば他にもこうした「歌会稿」が残存している可能性が出てきたことになる。

なお、点者は不明であるが、忠成の上に立つ者とすれば、周円法師、佐伯真中、少し若い加地信之らが候補にあがる。周円法師は安永四年に歿しているので、しいて言えば、後に宗匠として名高い信之であろうか。添削や評は適切で、力量を思わせる。

## 二、三首詠艸・三首題和歌

写本各一冊。周歌神社蔵。表紙に「ひかへ重安」「重安」とあるので、同社神主伊佐芹重安の歌集と認められる。「三首詠艸」は集中に「文化三年三月」の記事があり、また「信之死後点なし」とある加地信之は文化五年歿なので、その頃の歌を集めたものであろう。「三首題和歌」には集中に「文化十二年亥三月」「文化十三年八月」とあるので、それに従ってよいであろう。

標題の「三首」の意味はよくわからない。一題について三首を詠んだか、または三首を集めたものなのであろうが、両集ともむしろ三首のもの少ない。また歌の上に「抜」とあるのは他の歌集等から歌を抜いたものであるが、具体的にはわからない。評・添削を施した歌もあるが、前集については信之生存時のものが含まれているかもしれない。信之歿後の宗匠は不明である。

重安は文化頃の人で、文政七年の歿。父の重辰は「詠百首和歌」、祖父の重元は「神祇講詠草」の歌人、また曾孫の重弘も歌をよくしたので、代々歌の家と認めてよいであろう。

集中「大吉屋年賀組題」「惟辰より兼題」「武郷年賀二十首之内組題」「新屋敷会林」「右三首小松謙則会林」「吉田兼題」(以上「三首詠草」)

「武郷会林」「八月廿日兼題」(以上「三首題和歌」とみえるところから、当時各地で歌会が盛んに催されたことがわかるが、こうした注記のある歌以外にも、歌会で詠まれた歌が多く含まれているに違いない。武郷は『伊予歌人録』に「吉村一調、西条、周布村、青山流插花会頭、文化頃」とある。惟辰、謙則、大吉屋は不明。吉田、新屋敷は地名であるが、誰の主催の会林かは不明である。

## 三、句題百首

写本一冊。高鴨神社蔵。小松宝寿寺中興第八世覚弁の歌集である。筆写したのは、珍しく署名がないが字体からみて、鴨重忠である。

宝寿寺は四国霊場六十二番札所。第七世の見阿上人は冷泉為村の門人が歌をよくしたようであったが、歌集等は残存していない。わずかに「詠百首和歌」「柿本明神奉納詠」等に数首の歌がある。

覚弁は見阿の遺弟で、宝寿寺梵鐘再興についての二人の努力は『小松邑志』にみえる。寛政年中鐘が復び破れて余響を失い、見阿が近里を錫化して廻ったが、功半ばに老病で果せなくなったのを覚弁が志を継いだのである。

覚弁は近藤篤山とも交友のあったことが篤山の歌集から窺われる(『篤山遺稿』)。この天保年中は、「宝寿寺閑居」ともみえるので九世大存上人に住持を譲っていたのであろう。

「句題百首」は頼阿ら五人の『句題百首』に倣ったものである。詠歌の対象となった漢詩句に同じものを用いている。

末尾に併記されている上加茂神社神主の加茂季鷹・同松田直兄と覚弁の關係は、「一高弟」とあるところから、(覚弁は)季鷹の高弟である直兄の門人であるということであろう。所々にみえる評はこの直兄のものである。

覚弁の歌はこの「句題百首」以外には、見阿上人の顯彰碑を建て、そ

れに刻んだ「清く咲く沼の蓮をみればわが愚の心たのみありけり」の一首のみである。

四、佐伯貞中補

前稿「佐伯貞中の和歌」で、その墓はわからないと書いたが、その後、東予市吉田の清浄寺に一族の墓のあることを近藤勲氏より教示された。貞中の墓には辞世の歌が刻んであるが、摩滅して読めない。

また、岡山県玉野市住の子孫に当る佐伯安子氏より父母妻についての御教示を得た。

父は丹原大頭の佐伯家三代又四郎惟友（享保一〇年正月歿）、母は高橋兵右衛門政女亀（明和六年一〇月歿）、佐伯家四代は嫡子善六喬惟が継ぎ、弟の貞中は吉田に出る。妻は高橋兵衛門政寿女（寛延二年一二月歿）、後妻は木村重藏信真女忠（寛政九年二月歿）。子女には早世したのもあるが、二女が他家へ嫁している。貞中の跡は子の三太夫美文（文政八年四月歿）が継いだ。

以上、本稿をなすに当っては、綾延八幡宮・豊田栄年氏、周敷神社・伊佐芹重兼氏、高鴨神社・鴨重元氏、佐伯安子氏、近藤勲氏の御協力をいただきました。厚く感謝申し上げます。

〔綾延八幡宮歌会稿〕

夜春雨

月ならてまくらに近くもりくるはねやの戸つたふ夜半の春雨  
夜もすからふるやの軒の玉水のおとしつか成春雨のそら  
いつかなる心のまゝにふる里の庭もしるせぬ夜半の春雨

四句少し聞へかたく候

通辰 忠誼 久充

打しめりふるともわかつてさゝ竹の夜にはまとをのころも春雨  
法阿

身にそしむかすめる空もかこつ夜を明しかねぬるころも春雨  
光利

ふりくらす軒のしのふのいと水もたへくつたふよるのはる雨  
全

晴やらぬ雲もかすみはる雨のふるに淋しき夜半の手枕  
住矩

終夜ふり明しぬる春雨をさくもしつけき闇の枕に  
市女

取夜もすからまくらに聞もさひしさの猶ふりまさる軒の春雨  
全

ふるとしも見へすかすめる春の夜の雨を軒はに聞も淋しき  
喜美女

ふりつゝく日数もそひて杉の戸をさしも淋しき夜半の春雨  
全

晴やらぬ夜にふる軒の音つれもきくにしつけきねやの春雨  
季山

夜ふりて音も静けし草庵にいとさひしきねやの春雨初句落字歟  
墨淵

ふることも思ひつゝけて淋しさの猶いやまさる夜半の春雨  
政則

うたゝねの枕かへしていつとなくきくも淋しき夜半の春雨  
全

ふるからにうつるふ花のちりやせんなかめにもるゝ夜半の春雨  
展睦

淋しさは軒端をつたふいと水のしのふにあまる夜半の春雨  
成覚

朝またき軒のしのふにおもかけをのこしてふれる夜の春雨  
おもかけ何によりてやらんおほつかなく候歟

ふるそとは軒のしつづく音にのみ聞も淋しき夜半の春雨  
忠成

春雨の音つれさへもかすかなるよもきか宿の夜半の淋しさ  
惟政

くりかへしふる春雨のおとつれもしつけき夜半の軒のいと水  
全

晴やらぬ春のなかめの淋しさをくりかへす夜の軒のいと水  
政方

しつけしなしのふの露も玉琴の音にそかよへる夜半の春雨

全

月花のなかもたへて淋しさはいやまさりぬる夜半の春雨

忠尚

月影もいかてそ過ぬいく夜かもはるゝかたなき春のなかに

重遠

静けしな軒のいと水たへゝにぬるともしらぬ夜半の春雨

常房

けふ見つる花の木末やいかならんおやみもあらぬ夜半の春雨

就賢

灯の影もかすかにうちしめりうき手枕の夜半の春雨

全

ふり 軒の雫も音更でいとゝさひしき夜半の春雨

尊道

身のうへにふり行春の夜もすからおやまぬ雨の音の淋しき

有峰

取更行は軒のしつきの音すみてさひしきまざる夜の春雨

義辰

打むかふ晴間まれなる春の夜のなかにつゝく山の端もなし

全

春雨のふるき軒端に玉水の夜すから落る音の淋しき

全

夜をこめてかすめる空に降雨のおともしつけき軒の玉水

全

通夜おとも静けく春雨のふるやの軒につたふ玉水

恵道

ふるとなく軒端に伝ふ玉水の音もさひしき夜半の春雨

貞誠

暗やらぬ春のなかめの淋しきにねよとの鐘の打しめることゑ

貞閻

かすむさへかこつ夜比のさひしさに添ふる軒端の雨のおとつれ月

全

ふるとたにしられぬ夜半の春の(雨)音さへ忍ふ軒のたま水

全

ふるに猶庭の草木も色そひて恵みあまねき夜半の春雨

通見

草も木も恵をうけて春の夜の雨にうるほふ庭の静けさ

公貞

朧なる月のひかりはなを見へてふりし軒端の夜半の春雨

全

大空はかすみ渡りてそれそともしられぬ夜半の雨の淋しき

久林

ふるからに猶も淋しく我宿の軒端の山の夜半の春雨

好三

春の夜の空にもよふす雨に猶月もよりこぬ闇のさひしき

義政

ねさめして聞もしつけし軒端なるしのふにつたふ夜半の春雨

通久

聞に猶音も静けし更る夜のまくらに近き軒のはる雨

民女

ふりしきてねやもる音も山里はいとゝさひしき夜半の春雨

政次

いろゝのすさひの数の多ければふるともしらぬ春の夜の雨

定長

淋しくもまた長閑しなねもやらてひとりしむかふ夜半の春雨

全

霞立空はしつかにくれはてゝ春のなかめのいとゝ淋しき

惟義

恋ころもうきをかさねて逢夜半はこゝろにさわく袖のうら浪

通辰

もらさしと忍ふの森の下露にあらそふものはなみたなりけり

忠誼

とし月をあはてやゑのみ相坂の関そいもせのへたて也けり

全

立のほるけふりにしれよしほかまのうらみてもゆる思ひありとは

久充

したひぬる今宵を待て逢坂のゆふつけ鳥もなかすやあるらん

法阿

斯て世にくちやはてまし思ひ川なみたは袖に淵をなすとも

光利

もしほ汲すまのしほやの海士なれやからき人めをいとふうらみは

全

浮名たちそめてかへらぬ恋衣あたにはとを下ひもの関

住矩

我思ひせきのふし川あたにのみいくとしかよふ心つくしは

市女

いつよりか余所にこゝろのとけ初て我にゆるさぬ下ひものせき

全

神かけてたゝ一筋にいのりこしするしにけふそ三の山本

キミ女

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

切処無之着所無之候

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

初二句今少しありたく候歟

思ひのみ身にまとはるゝさねかつらこゝろくるしきあふ坂の山  
つゝめとも色にをいてゝうき名のみ立田の川の花のにしきは  
理山 全

切処無之候

あふ坂の山はこへてもまたひとへ人めのせきのひまをしらねは  
うつり香のふかきこゝろにくらふればつゝむにあまる袖のうら風  
かぎりなく思ひ益田の池水に深きこゝろの底はしらねと  
全 政則 墨淵

切所なき故落着しかたく候

かけてたにそれとしらねはうき人のよそにそみぬる袖のうら浪  
こよひこそめくりあふ瀬のくるま川わたるにたにもうしと待るゝ  
いたつらにむすふゑにしも深草の露のまくらに袖そぬれける  
成覚 忠成 見明

笠どりの山にすむともかいなしやなみたの雨にぬるゝたもとは  
かよひくるかいこそなけれさねかつらいつ逢坂の山をこゆへき  
惟政 全

あた波のたつ斗にてうき人をまつほのうらに待かひもなし  
逢事もなからのはしの中絶てかけし思ひのくちやはてなん  
なからへし身やかこつらん思ふ事いわての森の露のいのちを  
全 政方

恋渡るすゑのまつ山あた波のうき名たつともいとさはらまし  
思ふ事ゆふつけ鳥は名のみにてあたにすぎこし逢坂の山  
重遠 忠尚 全

かひなしや逢夜はなみの難波かたみをつくしても見るめはかりは  
はかなしやいととはるゝ身をこりすまのうらみなからにつもる月日は就賢  
全 常房

新屋シキ 三十四句つゝきあしく候歟 二段に成り候

恋ししかひもなきさの海士衣よせてはかへる袖のうら浪  
行末のたのみをかけてきふね川やいの袖さへぬれまざりけり  
尊道 有峰 惠道 義辰

契り置てあわてのうらもかせ吹はなみにうき名の立やそふらん  
うき名といひてのみ浪に用ひたく候  
全

思ひ川よしやうき名は流すともこひわたる身の何いとふらん  
物おもふ袖のうらはのあた波やよせてそかへる身をいかにせん  
貞誠 貞閻 全

仇波のこゆるもうしや諸友にかけし契りの末のまつ山  
今宵又おもふ心を里の名のいわてそかへる中のくるしき  
湛空 全

いく夜半か思ひ明しの海士衣見るめも浪に袖はしほれて  
きぬのあしたの原はわきて猶涙にかすむ人のおもかけ  
通久 久林 公貞

ほしあへぬ袖のなみたの瀧つせにうき音たつる中のくるしき  
はかなしやうき名たかしの浦浪にかゝる思ひの袖はしほれて  
好三 政次 全

はかなしよむすふ契りの末終にいつかとかなん下ひもの関  
とし月もすぎの下道つれなくていつかはこへん逢坂の関  
政次 全

かひなしや見るめもからて明しかた夜たゝしほるゝ袖のなみたは  
かけ置し契りもすゑの松山やつれなき色に浪のこゆらん  
通久 定長 全

こへていつおくやみるらんあたしよにうき名はかりは高円の山  
つれもなき心もしらていわしちのまつにちとせを何むすひけん  
全 惟義 政義

夕樵夫

咲満ちる花に爪木にこりわひてくるゝ山路をたとる柴人  
たきゝこりかへさの道もくるゝ日にいそきてみねを越る山人  
忠誼 久充

てにをは少しあひかたく情分かたく候歟 是又情分かたく候

暮ぬともしらてやたとる柴人は花おり添てかへる山路

光利

咲花に月のかつらもおりそひてくる山路にうたふ柴人

全

一ふしをうたふも淋し柴人のつま木おもけに帰るたそかれ

住矩

柴人も春の花にはかへるさをわすれてけふもたそかれの空

イチ女

春といへは爪木に花をおり添て日もゆふ暮にかへる山人

全

山人は爪木おもけにおひつれてくるしく帰るゆふ暮の空

キミ女

世のわさは猶もまはしはの道なれやくる麓にかへる山人

全

此頃の花の盛に柴人もかへるさしらぬたそかれの空

季山

花にのみ忠やすらひて柴人の家路いそかぬゆふ暮の空

墨淵

山人のおもき真柴もかり初にみへてそ帰るゆふ暮の空

政則

世のわさのおもき真柴もいとひなくうたひつれたる夕暮の空

展陸

おりそへし花は真柴に咲せつゝ暮ていへ路に帰る山人

見明

ゆふ間暮岩のかけ道あやうくも爪木をこりてかへる山人

成覚

夕されはうたひつれてそかへるさの道もにさほふ柴人のこゑ

忠成

ぐるゝ日にかへさを急ぐ柴人も花にやすらふ春のやま道

惟政

夕暮の露にしほれて柴人のたもとおもけにかへるやま道

全

あはれさもまはしはの爪木しつゝの身のおもけに帰る山のたそかれ

政方

爪木折いとなきわざも忘れつゝかへるゆふへにうたふ山人

全

山人も春のゆふへのかへさにやしはしはうさを花にわすれん

忠尚

かへるさの山路の花にくるゝ日もいとほてめつる春の柴人

重遠

あはれ世をわたる心一すしにくるゝ山路を帰る柴人

常房

暮てしも通ひなれたる山路とやまよはてひとり帰る柴人

就賢

おひつれてかへるやいつこ柴人の急きなれたる暮の山路に

全

くるゝ日に心せかれてしは人の家路遠しと猶急くらし

夕暮のみねよりおくる鐘の音にやまもと遠くかへる柴人

尊道

こへくれて帰るはおそき妻木にも花おりそへし春の山人

有峰

柴人も山路の花のやすらひにかへるさおそき夕暮の空

義辰

こりつれて我住里とゆふ暮の鐘をしるへに帰る山人

恵道

いとまなく爪木こるとや夕暮に真柴おひつれ帰る山人

義辰

夕暮はおのか家路へちりゝにはなおり添て帰る山人

全

今朝わけし小さゝのもすそ夕露にふたゝひぬれてかへる柴人

貞誠

御趣向珍らしく候 但し山か麓か少し樵路のえんありたく候歟 尤是にてもしかるへし

湛空

けふもまた道まとふまて暮にけり花見ておそき春の柴人

全

いり相の鐘にやすらふひまそなき爪木おもけに帰る柴人

貞園

聞に猶爪木のみちやいそくらんゆふへ暮行かねのひゝきに

全

山人のおもき真柴におり添てかへる夕の花のひともと

通見

おひつれてうたふ山路の一ふしは猶暮のこる春のしは人

公貞

入相の鐘のひゝきに山人のなをいそかるゝ岨のかけ道

久林

柴人のかへさの道に数ぞひてふくやゆふへの笛の一ふし

霞の山よみなれす候 少しことやうに承候

山の名の霞にふかくわけいりてかへさ暮行春の柴人

好三

あつさ弓いる日長閑き山道の霞をたとるはるのしは人

通久

たへゝにうたふもあやな夕暮の山もと遠くかへる柴人

政次

おひ下る里遠ければゆふくれの山のかげ路をいそく柴人

タミ女

柴人の花おりそへてくるゝ日もいとほてたとる山の下庵

定長

こゝろある柴人ならんくるゝまてあかすやすらふ花の下かけ

全

哀さよ柴をおもけにおひ人の夕暮深くたとる山みち

惟義

くるゝともいとほす花に世のうさもわすれてめつる谷の柴人

政義

哀さはまはしはをこりておひか身もくるゝにいそく谷のほそ道

三首詠紳

ひかへ

重安

晴やらぬ春のなかめのさひしきにねよとのかねのうちしめる声 貞闊

此哥下の句はいかにも幽玄にして春雨の情をよくふくませられ候 但し初二句夜の情にて少し残念か 二句春の雨夜など申たく候歟 又つく／＼と春のなかめのさひしにもよく似過候也 少し申分あれといかにも下働候まゝ終に出し申候

春雨のふるき軒はに玉みつのよすから落る音そさひしき 義辰

是又おくに同し

くるゝ日にかへさをいそく柴人も花にやすらふ春の山みち 忠成

さして珍らしき風情はなく候へともやす／＼とよみななし無子細まゝ是又加入いたし候

夕ぐれの峯よりおくる鐘の音にやまもと遠く帰る柴人 尊道

かねの音とよむ事はあまり不可然のよしうけ玉はり候 但し此哥幽玄にいかにも風情おもしろさまゝ加入いたし候

つれもなき心としらていはしろのまつにちとせをなにむすひけむ 定長

珍らしくおもひあはされ候歟

ふることもおもひつゝけてさひしさの猶いやまさる軒の春雨 政則

盧山雨夜草庵中の事とおもひつゝけ侍るにや

おもひ川よしやうき名はなかつとも恋わたる身のなにとふらむ

一首聞へ候 川のえんよくつゝけられ候歟

義辰歌政 八重女

義辰

江寒声

霜こほる玉江の芦のよの程にかれ葉みたれてうら風そふく  
みつの江のあしのよな／＼霜をきて枯葉さひしくうら風そ吹

屋上霰

風あらみまきの板屋に幾度かあられたはしる音の寒けき  
さらてさへね覚かちなるまきの屋に猶も夜すからあられふるなり

杜神楽

ます神も心すみてや此杜に榊葉うたふ声をきくらん  
あさくらの声うちかはへて神もさそうけ引やせん杜のしめ縄

行路雪

都思ふつたの細道跡たへて日を降る雪のうつの山ふみ  
うちはらふ袖もひまなくうつもれて雪にこへうき佐夜の中山

炭竈煙

降雪にみちたへぬらん大原や小野ゝすみ竈煙のみして  
雪は猶ふりうつめとも炭竈のけふりは空に立のほりぬる

冬祝言

豊としのしるしを見へて住吉の岸ねのまつにふれるしら雪  
幾代へんためしなるらし神垣のまつにかゝれる雪のしらゆふ

立春朝

天の戸のあくるあつまの空よりそ立春しるし霞をぬぬる  
いとはやも霞そめてや今朝はまつ立もまかわすはるのきぬらん

子日松

野辺に出てけふの初子の姫小松ひきはやしてを千代や契らん  
ことしおひの子日の松の二葉にもかねて千年のかけそこもれる

寄道祝

おさまれる御代にや猶もおしなへて栄へさかふる數嶋のみち  
幾千年代々に伝へてたれもみなその八重垣の道や守らん

松間鶯

野ち山ち花咲頃をまつか枝になれてそきなく鶯のこへ  
千代よほふ声もこもりて聞にさへまつ葉かくれ馴るゝ鶯

深夜月

さやかにみゆる空かな雲霧も更行まゝにはるゝ月影  
更行は露おきそひて庭広み草の葉ことにやとる月影

早春山

春のまつくるかたとてやあさひ影さしも長閑に霞む山の端  
さへくし昨日の空もはるきぬと今朝は長閑に霞む山の端

海上霞

長閑しな浪ちを遠くこし船のほかに霞むうらのあさなき  
浦とふくこぎ行舟も立こめてかすみわたれる春の海つら

鶯有慶音

此宿の軒はの竹にふしなれて千代の春しる鶯の声  
幾代々をふる木の梅にうくひすのこへにははせて千代よほふ也

梅薫風

梅匂ひ来て木のもとつけようは玉の闇にあやなき梅の下風  
そことなく風のたよりに誘ひ来て咲かぬ軒端もにはふ梅かゝ

若菜

春よまつ野守を友ととふひ野にさそひてもまた若菜つまゝし  
しるしらすみつ野上野に打むれて雪間の若菜さそな摘らん

春浅みまた風さへてきへかてのゆき間の若菜摘もたまらず  
是は遺不申候

岡籬

名にしるくゆきゝの岡をわけみれば小籬の露のみたれてそちる  
朝日影さすやむかひのおかの屋にひかりうつろふ露の玉籬

玉とこそ誰も見るらめかせ過て露みたれちる岡のさゝ原  
是は遺不申候

見花

家ちをもさらにわすれて吉野山なかめ日くらしみねの花園  
春色に香に心うつして春の日のくるゝもしらす花をこそ見れ

山家花

いつしかと花の盛になりぬれば山さくら戸も友そまたるゝ  
花甘かたりあふ友しなれば咲花をひとりめてぬる山の下庵

花契多春

春毎にをりたかへねはちぎり置はなこそ千代の友としもなれ  
花よしれ幾世の春をちぎり置いていろ香に深くうつす心を

氷室

うつもれて氷きへせぬ氷室山夏をよそなる風の涼しさ  
夏きても消ぬ氷室のふゆこもりあたりの風も袖にさむけき

更衣

昨日まで馴にし花の袂をもけふ立かへてなつはぎにけり  
色に香に心をそめし花の袖なつの袂にたちかへまうき

枯野風

秋に吹音よりも猶さひしきは枯野にさゆる秋の上風  
いつしかとみつの上野は霜かれて残るすゝきにかせすさむなり

山家氷

夜のほとに氷はてゝや絶ぬらんまつらの山のたにの水音  
柴の戸に夏ときゝつる谷水も今朝は氷りてをとつれそなき



寄獣恋

おもへとも人のこゝろの秋の野に妻こふ鹿の音をのみそ鳴  
人よしれゆきあひ山のかひもなく思ひまさるのしけきなけきを  
いつよりか人はこすへにかひなくもおもひまさるのなけきこるなり

朝郭公

朝戸あけて聞もめつらしほとゝきす雲のいつくに過る一声  
朝毎に猶もまたはやほとゝきすきく一声の今の余波に

岡躑躅

咲しよりゆきゝの岡の花つゝしたれも手折て家つとにせん  
夕日さす岡へのつゝし色はへてひとしほ深きはなの紅

川款冬

露も猶色をしそへて山ふきの八重咲にはふ井手の玉川  
玉川や井手の款冬さきにけりをおかおり得てかはす鳴頃

暮春藤

みきはなる常盤のまつに咲ても春くれかゝるいけの藤波  
暮て行春の余波か弥生山むらさき深くかゝる藤浪

十五夜月

見るに猶光りもわきて名に今宵そらにくまなき月のさやけき  
文化三巳年三月三首

早春浦

きのふにはかわるとなしに吹かへて春になるをの浦の松風  
今朝よりは浦の浪ちの長閑にも霞わたりて春やきぬらん

野若菜

春きぬと雪間をわけてもろ人のかち野ゝ小野に若菜摘らし  
春浅み雪のふる野ゝそれなりと若菜つむてそふ道はまとはし

春祝言

周桑和歌資料三種

はるの日の霞光りもますかゝみくもりなき世は空にみゆらし  
くもりなき世をこそあふけ春の日のさしも長閑にめつる光りに

梅花遠薰 惟辰より兼題

春風にさく方遠くさそひきてはななき里もにほふ梅かゝ  
誰里のかきねにあまたさくやこのさかぬ軒端もにほふ梅かゝ

早春朝 武郷手賀貳十首之内組題

朝日影さしも長閑にいろそへてはるきにけりとかすむ山の端  
山家郭公 新屋敷会林 信之死後点なし

ほとゝきす人もとひこぬ山里にをのれかたらふゆふ暮の声

時鳥今やもらすとまつの戸をふるさてそなく夜半の一声

名所夏月

明やすき空にのこりて難波かたிரり江の芦のみしか夜の月  
すみのほる影ほとなくも夏の夜は月そいるさの山にかくるゝ

雨後眺望

雨はるゝ遠山本をなかむれはまつあらはるゝ杜のむら立  
久かたの雨のはれ間に見渡せは浦の浪ちにかふ釣舟

海辺霞

のとけしな海つら遠くこく船もほのゝかすむ浦の朝あけ  
浦浪のそこともわかす立こめてかすみをとるはるの舟人

朝聞鶯

たちいてゝきけは長閑に朝日さす梅のたちゑにうくぬすの声  
すみ馴ておのかやとりの呉竹にあさらすきなく鶯のこへ

初恋

ふみ迷ふ恋の山路のおもひ草露わけそめて袖ぬらしける  
行末の猶いかならんいりそむる恋のやま路はふみもかわらて

右三首小松謙則会林

氷室

うつもれて氷きへせぬ氷室山夏をよそなる風の涼しさ 是は大吉屋当座  
夏きても消ぬ氷室のふゆこもりあたりの風も袖にさむけき

更衣

昨日まで馴にし花の袂をもけふ立かへてなつはきにけり  
色に香にこゝろをそめし花の袖なつの袂にたちかへまうき  
是は大吉屋  
当座

水辺梅

行水も深くそにはふ梅津川名にあふ花の盛咲頃  
梅咲や影もくもらて山川のみつにうつろふ花のかゝみは

柳帯露

春雨の名残の露をぬきとむるたまの緒なかし青柳の糸  
吹かせも世の長閑さのはる見へすつゆの玉ぬく青柳の糸

寄山恋

たとりつゝ分迷ひけり入そむる恋の山路はふみもならはて  
思へとも人の心はあさま山のそらにむなしく煙のみして  
吉田兼題

深夜春月

更行は猶もおほろにたちこめてはなにかすめる春の夜の月  
三月三首 花似雲

よしさらは行てしもみん咲つゝく花かあらぬかみねのしら雲  
いつれとも見分かたしや白雲のかさなるみねの花の盛は

藤花盛久

暮て行春をとゝめて咲匂ふさかり久しき花のふしかえ  
夏も見ん春の日数は立田川にほひふりせぬ花のふし浪

遠村竹

すなをなる姿をよそに見よとてや幾代しめたる竹の一むら

世々をへてとみ栄へよと呉竹の深くしけれる遠の山里  
吉田月次兼題 毎朝見花

朝戸あけて幾日かめてぬ庭桜さきちるまての花の色香を

同 帰雁知春

時きぬと霞雲ちをかへる鴈はな咲春もよそに見すてゝ  
月三首詠草 朝更衣

色に香に馴にし花の袂をもけさ立かへて夏はきにけり

花の袖けさ立かへてなつ衣きのふの春の名残をそおもふ

尋時鳥

時鳥初音きかむと人毎にたつぬるものをなとかつれなき  
けふ幾日尋くらしつほとゝきすたゝ一声のきかまほしさに

寄枕恋

うちとけてかはす枕のうつり香をまたあふまてのかたみとをせむ  
つゝめともうき名立けりあふ事をつけの枕や人に告げむ  
卯月吉田兼題 樹陰卯花

雪とこそあやまたれつれ夏山の木かけむらゝ咲る卯の花

里卯花

わすれてはよそにしられぬ雪かとそ見るはかりなるうの花の里  
卯花の咲しかゝれはしら浪のをとせてたつと見ゆる山里

雨中郭公

ふりいてゝ今そなくなる時鳥をのか皐月の雨雲のそら  
五月雨のそらにことゝふほとゝきす声もしほれて鳴渡なり

寄弓恋

偽としら木の真弓いかてかくむすふ契りのひきたかふらん  
こゝろひくかたをもしらすしらま弓いく夜なゝにものおもふらん

早苗

ぬるゝをもちとはてをとれけふ過は門田の早苗ふし立やせむ  
五月雨にぬれそふ袖をけふ幾日ほさて山田の早苗とるなり

夜窓橘

吹入るゝ風なつかしく小夜更てゆめの枕にほふ橘  
いにしへの誰か袖の香か夜もすから余波をこめて匂ふ立花

窓前竹

移し植て生そふまゝに葉分吹かせも涼しきまとの呉竹

初秋露

きのふにはかはるなしにいとはやも袖におほゆるけさの白露  
秋きぬと思ひあへすもうたゝねのまくら涼しき袖の上露

山家萩

人とはぬ柴のいをりの夕暮に首つれけりな秋の上風

秋祝言

曇りなき代は久かたの空はれてのきも千年の秋にすむなり  
くもりなき代をこそあをけ秋の夜のてりそふ月の影もさやかに

風光日新

昨日にもかわるとなしにをのつからふくも長閑きけさの春風

寄道祝 直政勸進

おしなへて誰もあふかむ幾代とかいやさかへゆく敷嶋の道  
すなをなる姿を見せてみち広くいやさかふらん大和言の葉

大吉や追善  
十五音内組題

窓近き竹の葉山のふし馴てあはれそきなく鶯の声

山家柳

淋しさも春はわすれて山里にくり返し見る青柳の糸  
春きても人はとひこぬ山里をなくさめかほになひく青柳

野若艸

春きぬとおもひあへすもから衣すそのゝ原に萌る若艸  
春きぬと残りし雪もむらきへてはつかにもゆる野辺の若草

寄杉恋

契り猶あたならぬ中にたくへ見よ色かはららずもふるの神杉  
尋ねこしするしもあれなつれなきのうき年月を杉のむら立

岡残雪

春きてもまた風寒き岡のへのみちの行手に残るしら雪  
朝な夕なみれはむかいのおかのへのこるもさむき雪のむらきへ  
岡のへやまたるゝ花のおもかけをみせて梢に残るしら雪

古郷春月

故郷のあはれも深くたちこめておほろに霞はるの夜の月  
哀さよみる影ふけて故郷のかすみにしつむ春の夜の月

春の夜の月より外にたれとはむとし故郷の霞軒端を

寄花恋

いつしかとうつろふ色の花にこそあたなる中のちぎりをもしれ  
見そめつる心の花をすへ終にあたならぬ中に咲せてもかな

咲頃のをりにとはましよしや世に立んうき名も花にゆつりて

里山吹

名にしあふやいわての里にいわぬそのいろをふかめて咲る款冬の花  
里の名のしのひていわま色なからさすか盛とにほふ山吹

忍ふてふ里にしさけはことゝへといわぬいろなる山吹の花

暮春水

暮かゝるはるの行衛や山川のなかれてはやき水のしら浪  
ゆく春をしはしとゝめて谷川の水にのこせる花のしからみ

かけ移す花のかゝみもくれて行春にくもれる庭のやり水

寄巖祝

うきなき巖のまつの深緑世々にかわらぬ色やみすらん  
苔むして猶いく千代も動きなき岩ほそためし御代の行すゑ  
苔のむす巖に生ひて松か枝もひとつ緑の色そふかむる

夏艸滋

此仄にはらはて秋の花や見むなつ野にしける草の色く  
しけりあひて道もわかれず見へにけり深き夏野くさのさまく  
そことなくすゝきかるかや茂りあひて道しも分かぬ野への夏草  
しけりあひて花にわけこし山里の道やいつこと迷ふ夏艸

月前郭公

五月雨の晴る雲間に月澄て声もほのめく山時鳥  
もろともに山を出てやほとゝきす月澄わたるそらになくなり  
夕月にほのきゝそめて時鳥あり明までにをちかへり鳴  
さつきやみなほおほ(つ)かなしやほとゝきす月いつるかたの空に鳴也

山影写水

戸無瀬川なかれて水のそきよみうつろふ山の影もくもらす  
谷川の岩もる清水ふちなしては山しけ山影うつすらし  
落瀧津谷の下水よとむ瀬にしはし移うつりふ山の面影  
せの海は四つよつのときはにふしの根の雪のすかたをみなそこに見る

首夏

くれ行きし昨日の春の花の袖夏きにけりとたちかへまうき  
たちかふる衣の色に夏みへてひとしほ春の余波をそ思ふ  
花の香に馴し袂もぬきかへてけさは涼しく夏のきにける

籬卯花

あまの住里のしるへか名にしあふ籬のしたにさける卯花  
よそめには雪かとみへて山賤もかきほにあまた咲る卯花  
咲つゝく賤かかきねはさなからにゆきかとも見ん卯の花の頃

惜別恋

惜そよまたのあふ夜もいつかはとおもひわかるゝ横雲のそら  
きぬくの別そつらしきむしろに袖をかたしきまれのあふ夜は  
いとゝ猶袖こそしほれおきわかれ帰るあしたのみち芝の露

三首題和歌

重安

文化十二年亥二月三首

柳帶露

朝またきかさしに露をぬきとめてたまのをなりき青柳の糸  
春風もたへて長閑きけさはまつ露の玉ぬく青柳の糸

麓早蕨

小野山の麓にもゆる早蕨をつとにせんとや折はやすらん  
麓にははや萌出るはつわらひ爪木わすれて手折しは人

不言恋

あはれとも人よ見よかし斯そともいはてこかるゝよるの螢火  
思ふ事はて心のうちにのみ幾年月をつもるくるしさ

遇恋

さりともとかそふるもうし逢事の絶て過行あたし月日は  
逢ふ時の其かね言もたへはてゝ積るうらみの中に過ゆく

擣衣

をき明す賤かさ衣袖さむく霜をかさねて打しきるらし  
よそなから聞も寒けし秋風の夜寒のころも賤かうつ声

立春

朝日影もれぬ恵のひかりよりたつ春しるく霞む山く

出る日の光り長閑く春立といふよりやかてかすむ山の端

弥生三首  
松間花

詠むれば松の木の間に咲ましるいろもこまかき花の夕はへ

枝かはずまつにみとりもうつもれてははなこそ咲匂ひけれ

詠あれやまつの木の間に咲みちてみとりにましる花の白たへ

千世の春花咲にほへ常盤なるまつの木の間に枝をかはして

野 董

今宵ねてあすも摘なんつほ董野辺のしほふの露深くとも

春深く成行まに誰もみなむれている野に董をそつむ

いとしく袖こそぬらせ春雨の降野に小野にすみれつむとて

暮て行春のかたみに摘やせん野へのすみれの露しけくとも

夢中逢恋

うつには猶しとふそようたにねに逢と見る夜の夢のはかなさ

斯そとはいもしるらめや思ひねの夢の中にも逢ふと見ゆれと

夜なに逢ふとしみるは思ひねのころやかやふを夢のうき橋

逢ふとは見てもうたにねのゆめてふ夢を覚てはかなき

卯月三首  
首夏藤

行春の余波をふかみ夏かけてはな咲かる池の藤浪

むつまじき色のゆかりを夏も猶咲藤か枝の花に見すらし

抜六きのふまておしみし春の跡とめてけふから夏にかる藤浪

あかす見ん松の梢に夏かけてこき紫のふしの夕はへ

夏きぬと幾しほ深し紫のいろふからん池の藤浪

暮山郭公

抜六名さへ猶小倉の山のゆふ暮にあはれをそへてなく郭公

一声を爰に残して時鳥雲の夕ある山に過ぬる

名にしおはる尋て聞むほとときすぎなれの山の夕暮のそら

夕へく待とししらは一声を鳴て聞せよ山ほとときす

一声を爰におしみてほとときす暮るる外山の空になくなり

富 士

抜十晴わたる空に残りししら雲とまかふやふしの深雪なるらん

けぬか上にまたふりそへてとことには詠もあかぬ雪のふしのね

見るうちに面替りしてふしのねの空にたよふ風のうき雲

よそ目は詠めくて花と見むふしの高根の雪のしるたへ

とことには降もきへぬも時しらぬゆきは都のふしのしは山

重安歌代  
みやこのふしとはひへの山のことなり

五月三首  
是は大坂評聞時鳥

千枝の数なをも聞はやほとときすしのたの森にもらす初声

武郷会林  
皆在待つけて聞そめつらし時鳥忍ふる比の夜半の一声

皆皆聞てしも猶そまたるるほとときすあかぬ名残の有明のそら

河夏月

あつさをもわすれにけりなく田川なかれ涼しく月をやとして

抜 暮るより涼しきみへてすみ田川瀬きりの水に月そやとれる

旅宿雨

都出てひとりふしみにやとる夜のおりしも袖をしほるむら雨

草枕かりねの床の露けさになを袖しほる雨を淋しき

朝早苗

朝露にぬれての袖をほしもやらすおくれしとてや早苗とるらん

起て今朝門田の早苗とる田子のもすそをいととほすひまそなき

湖上夏月

さよ波に影をうつしてすしくも月すみわたるにほの海つら

みる影もさらにくもらぬからみ山にほの海なる月のすしき

霜とみる影すしくも夏の夜の月そうち出の浜の真砂地

旅行雨

降雨にあやうさ添て旅人もわたりわふらんきそのかけ橋  
ぬれつゝも猶 行ん旅ころもかさなる山にあめをしのきて

嶋夏草

夏艸のしけみの露をおきつしまたれ分よとかうちもはらはす  
夏草の中にさゆりもましるとやしはし嶋ねに舟よせてみん

抜六霧嶋に露をふかめてなつ草のいや生茂り色そ涼しき

里蚊遣火

三拔哥 夜な／＼は遠の今里かひたてゝおもひやくゆる賤かあはれさ  
里遠き賤かかやりのゆふけふり思ひふすふる程を見へける

寄苔恋

ちりならぬ恨そ今はつもりけるこぬ夜むなしき苔の莖に  
常盤山岩ねに生るこけ莖しき忍ふとも色はかわらし

三輪山こけの通路あとたへてうき年月を杉のむら立

銘之評 水辺螢

音羽川岩間の浪に夜な／＼はてらすほたるの影そ涼しき  
飛ほたる思ひを見せて山川のいわほさはらすもへあかすなり

江萩

うちそよく音もひまなく流江にぬれて起臥荻の上かせ  
籬朝顔

あさねせそ行ても見まし山かつの庭の垣ほの権のはな

東白に起出てみれば朝顔のはなそはへある庭のませかき

寄魚恋

うき人のこゝろも終に秋ふけて身はさひあゆのよるかたそなき  
いつよりか思ひますから山川のよる瀬あらはとこひわたりけり

山家水 是は銘之評哥也

奥深くすまはやすまん行水のなかれしつけき山蔭の庵

柴の戸は岩もる水の音をのみあけてくれ友となれてこそすめ

掛樋水

夜や寒きかけ樋の水もせたへしてをともしつけき氷冬川  
夜の程に氷はてゝややま川のかけ樋の水の音もしつけき

名取網代

思ひやる袖さへ寒し宇治川にひをやくかほり網代もる舟は  
かゝり火の影たへ／＼に網代もり身は宇治川の寒き夜な／＼

ひをのほる川瀬にみゆるかゝり火の影も更行宇治の網代木

夕樵歌

山深みくれにけるかなうとふ声妻木の友の道のしるへに  
くるゝともはや里ちかしうとふ声薪の山居帰るさのみち

十月三首 橋上霜

旅人の往来もあとふよをわたる朝霜ふかききそのかけはし  
東路にさのゝ船はしをひかせに霜をかさねて帰る旅人

旅人も渡りわふらしふみ分てあさしもけたぬせたの長橋

浜千鳥

よる浪の音もふけるの浜かせになくや千鳥の花も寒けし  
夜を寒み声も高しの浜千鳥うらも定めず鳴渡るなり

友さそふ声よひつきの浜千鳥なくねも寒し有明のそら

更る夜の磯うつ浪のはま千鳥こゝろならてや声さはくくなり

替変恋

うしや我かわるもしらて幾夜半かしゐて頼めし人のこゝろを  
またいつと替るもあたに甲斐そなき人のこゝろのよそにうつりて

名所里

幾秋もゆかりの色をたつねはや花の名にあふ萩原の里

世をてらす月の光りの中にしもわきてさやけき更級の里  
八月廿日兼題

田家秋興

稲葉吹とはたの里にかせ立てひかぬなるこの音も絶せず  
門田守秋のゆふへはものうきに淋しとたにも賤はおもわし

寄松祝

幾千年生そふまゝに仰きみん尽ぬ例や宿の松か枝

春毎のみとりをそへて此宿のおひを寿くまつの言の葉 文屋和七

風早郡富年賀三十首組題之内 早春山

きのふまで雪けにさへし山の端も今朝は春とや先かすむらん  
正月三首 早春鶯

今朝聞し和黃鳥の一声にのときき春を誰もしるらん

長閑けしな梅の園をにうつり来てはるを告たる鶯の声

山霞

むら／＼に残りし雪もきへはてゝひとつみに霞山の端

雪とみし昨日の山も今朝ははや春の光りにかすむ長閑さ

春神祇

名にしおふは神に手向ん春はまつさくら宮の花のゆふ  
千早振神のみまへのさくら花いく春かけて尽ぬなめは

古郷雨

けふもまたつれ／＼みれば古郷にふりのみまさる雨を淋しき  
住みすてし宿の板戸の苔むしてあはれとかみし雨を降ぬる  
住あれし人もとひこぬ古郷のふる音そきく雨を淋しき  
つれ／＼とふるも音せて古郷のあれまの籬つとふなりけり

沼昌蒲

露深く茂りあひてもいとほしをひくもあかす沼のあやめは

蚊前螢はよしぬるもいとほすおり立ていかほの沼のあやめひくも涼しき

東路のいかほの沼のあやめくさいかほともなをひくも涼しき

窓前螢

暮るより思ひみたれて窓近くほたる飛かふかけそすゝしき

窓近く籬の竹の夕かせにおもひみたれてほたる飛かふ

吹かせも涼しくなりてゆふやみのまとをてらして螢飛かふ

窓近く園の呉竹よな／＼は堪す照して螢飛かふ

文化十三年子年八月高野山補陀洛院性海  
十七廻忌追善

秋懷旧

秋の夜のかたふく月に忍ぶそやおなしむかしの影と見るにも

秋の夜の月を詠てあはれてふことをあまたに忍ぶこしかた

のつからなみたをとして影や見んむかしを忍ぶあぎの夜の月

松田伊予守賀茂県主直兄点也

句題百首

小松新屋敷村

一之宮別当前宝寿寺寛弁

句題百首 春十五首

遙峯帯晚霞

峰高みのこる日影をたちこめて薄くれなゐに霞む夕はえ

残雪更粘枝

山さむみ枝にこほりてきえかての雪はまたるゝ花の西かけ

春浅霜連夜

春を浅みそら<sup>また</sup>冴かへるよひ<sup>り</sup>に置霜<sup>しつら</sup>ふかし庭のさゝ原

梅残数点雪

さえのこる木末の雪にうめの花色はまかへと香やはかくるゝ

清月上梅花

更行は霞もはれてうめかえに澄かけ匂ふ春のよの月

柳間黄鳥路

青柳をおのか宿とやはるしめて木末をつたふ鶯の声

春江浪拍空

難波江やそもひとつに立こめて霞む雲井にまかふ白波

春深花始開

大かたの春におくるゝやま桜夏にも今は咲かゝるらん

花開紅樹乱

咲にはふうす紅の糸さくらいとゝみたるゝ風のまにゝ

花開風雨多

さくら花咲そふ比の風ませの春雨はかりうき物はなし

坐久落花多

まとゐする苔のむしろにちり敷てたゝまくをしき花の木の下の

花落樹猶香

ふり積る雪かとはかりちる花に咲ぬ木末も匂ふ春風

類簷掛古藤

あれはてゝ軒はかたふくわひしさも咲かくしたる花の藤浪

歳時春猶少

一年の中にも分て花とりの色香をつくす春を少き

春尺鳥声中

鐘の音も鳥の八声に聞そへて心つくしのはるの別路

深谷夏聞鶯 夏十首

谷ふかく尋ね入りつゝほとゝきすつれなき枝に鶯の鳴

緑樹連村暗

茂りあふ片山かけを分行は青はにくもる里やいくむら

山雲夏忽繁

夏も猶ふりそふ雪と見えつるはこしの高根にかゝるしら雪

松風五月寒

水室山五月雨はれてまつ風は衣手寒し冬やのこれる

風樹鳴蟬咽

風渡る青はの露に袖ぬれて鳴しほるゝもせみのは衣

秋声帶雨荷

涼しくもまたしき秋を音つれて夕立すくる池のはちすは

扇羅風生竹

夕されはならず扇に取かへて竹のはそよく風を涼しき

泉声到池尽

名におへる音羽の瀧の流れさへ末はしつかにすめる池水

雨余生晚涼

雨はるゝ名こりの露も軒はより落て涼しき夏の夕風

螢入定僧袖

よそめには玉かと思んもはすかしなほたるすかれる墨染の袖

露気早知秋 秋十五首

いとはやも秋をしらせてけさよりは光りことなるのへの白露

一雨洗残暑

たえかたしのこるあつさも村雨の音より秋にかはるすゝしさ

野色混秋光

秋の野の千くさの花の露ことに光りわけてや宿る月影



天高雁横空

秋風の吹を雲ちのしをりとや声もさやかに渡るかりかね

終夜蕃茶声

終夜さのみなきそきりくす秋の思ひはなれ斗かは

稲花千頃浪

詠めやるかきりやいつこ千町田に穂なみをよする秋の夕風

江声入秋寺

秋風のふくや入江の波の音にいそ山寺のかねひくくなり

月色一窓虚

よのうきにこる心もよるまゝにむなしく澄る窓の月かけよらし

江清月近人

難波江や清き流をくむ人の手にも取へき波の月かけ

鶏声茅店月

友と見る浅ちか宿の月もはやしらむか鳥の声を聞ゆる

山晓月初上

よこ雲はそらに別れてあり明の月かけほそく出る山のはたかし

月向白波沈

あり明の浦波遠くしつむかと見えてほのくしらむ月陰

遠山青入霧

ひはらのみしはしのこりてかねの音もきりの底なるをはつせの山

風便数砧声

おくれしといつこの里も秋風のたよりにしけく衣うつ声いよたし

新霜染楓樹

下染の露もいつしか置かへて霜に色そふ木々のもみちは

落葉無行路

柴人よ分なまとひそ冬来れは落葉に埋む谷のかよひち冬十首

木落見他山

木からしに軒の木末はちりはてけさはへたてぬ海こしの山そきはら

人跡板橋霜

朝日より先にや出し山人の霜に跡ある谷の板はしあがし

破林霜後月

もりかねし木末は霜霜の吹にあれ果て光りもすこき冬のよの月まろし

山寒水欲氷

外よりは先やこほらん大井川あらしの山のかけに流れて

一鳥過寒水

哀也かもの川波氷る夜に友なし千鳥鳴わたるこゑ

清晨雪擁門

柴の戸をたくく嵐もうつもれて今朝は静につもる白ゆき

晴雪落長松

朝日かけさし添ふ枝は雪とけてみとりにかへる峯の松原

独釣寒江雪

難波江や見るめも寒くふる雪にひとり世渡る蟹のつり舟

流年川晴渡

あしろ木にさはらぬ年の波こえて月日なかるう治の川水まかし

心知人不知

忘れぬ心つくしをそれともしらぬ人しもいかて恋しき恋十首

唯有涙痕多

思ひ川せき留あへぬ中なれや袖に泪のたきつしら波

三年不見書

かり金は三たひかよへつれもなき人の玉すさ見る夢も見す

涙尽腸欲断

うき人を恨みのなみたつき果て命もいまはたへぬへきころ

入夢到如今

あふと見し夢をうつゝに引かへて今のうつゝをゆめになさはや

花開更憶君

殊更に花さく頃は忍はれて色香にまさる人のおもかけ

空闌残燭夜

闌ひろみひとりぬるよのわひしきにつきぬ思ひものこるともしひ

恨別鳥驚心

さらぬたにいそく別のうらみをはいかにせよとか鳥の鳴らん

別後会難期

飛鳥川明日はふち瀬とかはる世に別てのちをいか頼まん

何処更相逢

我中は所さためぬあま小舟寄へも波にみをつくしぬる

山路雲間没 旅十首

やとるへき里はいつこかしら雲のかゝる山ちをいそくたひ人

江辺問船子

淀川や入江の岸に旅人ののりおくれてや舟よはふ声

舟行夜已深

くれてより舟ちの程はしらね共夜や更ぬらん月そかたふく

棹入黄芦浦

おほつかな声のは分てさす棹のみなれぬ浦にとまりをそする

蒼苔満山径

蕨のみかこけむし渡るほそ道を猶こえわふるうつ中山

郷信寄胡雁

都人いかにと問はたひはうき物とつたへよわたる雁かね

人行秋花中

むさしのや千くさの花を分ゆけは旅ちのうさもしはし忘れつ

路明残月在

のこる夜に岩のかけ道たとらすも月にこえゆくさよの中山

灘声入夢寒

裾野なる河せの音にゆめさめてまくらに寒きふしの山風

客愁双鬢覚

うき旅のやつれも深く置霜の蓬を見れば身をそおとろく

幽居有余楽 閑居十首

うき世をはよそにへたてゝたのしさの心にあまるおくの山住

尽日掩柴扉

吹よせし風にまかする柴のとも夕はひしく月の詠めに

秋月離喧見

霄の間の荻の上風音たえて月静なるよもきふの宿

深居絶是非

世の中は澄かにこるかしらてたゝ心にまかす山の井の水

山中無曆日

奥山は月日わかねと春秋は花と紅葉の色香にそしる

鳥啼人不見

のかれ住人はいつこかしら雪のかゝるみ山に鳥は鳴とも

残生随白路

老の波寄へをこゝと定おかんなるゝかもめを友とちきりて

閉門留野鹿

草の戸をさしてとゝめん秋の野の小鹿も友とふしなるゝまで

身在能無事

何くれの求なければ身も安し命の末は在にまかせて

竹径通幽処

此奥に誰かかくれ家やありつらん葉山分入竹の下みち

半山無夕陽 雜二十首

夕日かけしくれの雲をさし分て半ははるゝ笠とりの山

鐘声雲外残

初瀬山峰もひはらもくれはてゝ雲にのこれる入相の声

水窮天尽头

難波江や浪路の末に夕日かけしつむと見えて空もわかれす

流水浸雲根

生田川水上遠くしら雲のそらより落る布引の瀧

山光落釣舟

尾の上より夕ひのかけもさしそひて磯山本を廻るつり舟

船与浪高低

世を渡る業にはなれてうきしつむ波もおそれぬ蟹のつり舟

風林無鳥宿

風渡る竹の林はむら鳥の宿りかねてや立さはくらん

天色無情談

ものいはぬむなしき空をかこつ哉人のうきみをしらぬ余りに

人間多苦人

よの中の思ひは同し心とやうきをかこたぬ人しなけれは

世路山河嶮

世を渡る道を思へは山川に下すいかたのうきは物かは

清溪孤照影

かけうつつ谷の下水汲たひに心澄やととふ友もなし

松多寺不見

鐘の音の雲にひくくや寺ならん松かけ深く尾の上へたてゝ

遠嶂収残雨

麓よりはれ行末の峰遠くひはらに深くしつむ雨くも

落日沈沙頭

沖つ洲の真砂に寄する波の花紅ふかく夕日さしそふ

清風隔世塵

小夜更てしつかに聞はよのちりも払ふや清き軒の松風

衰鬢臨朝鏡

朝なく向ふかゝみにふりそひてかしらにつもる老のしら雪

瀑近夜疑雨

忘れては雨かと思ふかり枕やと遠からぬ瀧のひゝきを

鷺立斜陽裏

夕日さす入江の岸による波の色もわかれす立る白さき

山田級々高

早稲おくて色もさまく麓よりのほる岡へにつく小山田

僧談悟色空

咲花の心をとへは色も香も空しとかたる墨染の袖

上賀茂神主

正四位下山本安房守

賀茂原主季鷹翁

一高弟

同社神主 正四位下松田伊予守

賀茂原主直兄門人

伊予国小松

一之宮別当前宝寿寺覚弁

詠艸也

※以上三集とも原本では歌は上句・下句で二行書にしてある。



貞中墓（裏・辞世の歌）



覚弁墓

覚弁短冊



山内春雄氏蔵

入夢到如今 あふと見し夢をうつつに引かへて  
いまのうつゝをゆめになさはや 覚弁

鴨重三元氏蔵



いく千年さかへゆくらんよを守  
なもたかゝもの神の宮のは 覚弁

寄山祝  
すえ遠く猶分のほれ此春の  
みそちを千代の山口にして 覚弁

※本稿は昭和六十一年度教育研究学内特別経費「愛媛の言語・文学資料の調査研究並に刊行」による研究成果の一部である。

（昭和六十一年十月十一日 受理）